

学図の新しいライブラリー 3

小学校高学年以上むき

# 地獄の上の五百日

和巻耿介・作 ◆ 野崎 猛・絵



NDC 913

地獄の上の五百日

和巻耿介

学校図書・1983(昭和58年)

158P・22cm

(学図の新しいライブラリー 2)

学図の新しいライブラリー ③  
地獄の上の五百日

発行 1983年4月30日第1刷

著者 和巻耿介

画家 野崎 猛

発行者 漆原利夫

発行所 学校図書株式会社

東京都品川区北品川1-1-14 〒140  
電話東京(03)472-2741 振替東京872415

印刷所 図書印刷株式会社

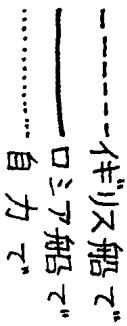
© Kōsuke Wamaki, 1983 8393-36458-1038

落丁・乱丁本はお取りかえいたします。

# 地獄の上の五百日

和巻耿介・作◆野崎 猛・絵





もくじ

一 帰り船

9

二 風待ち

15

三 千石船

24

四 陸と空と

28

五 海の牙

35

六 北西大風

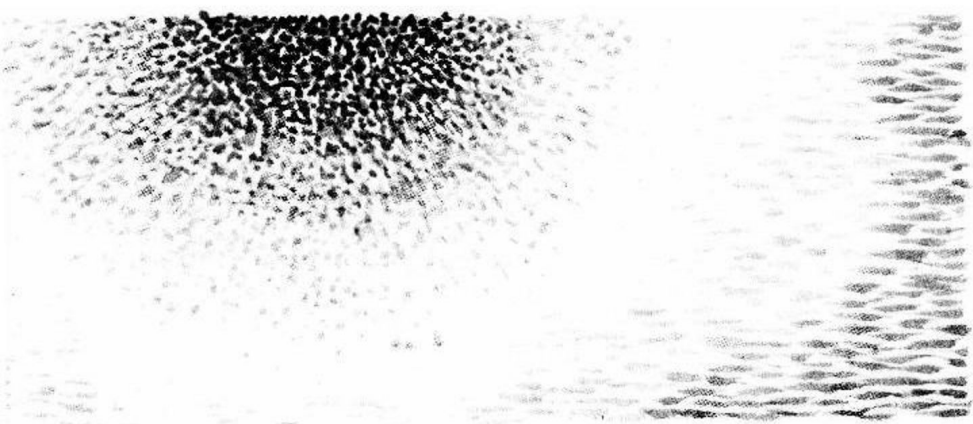
47

七 にげる島

56

八 陸よさらば

64



九〥白い鳥青い鳥

十〥春を待て

十一〥赤道の正月

十二〥生きている悪夢<sup>あくむ</sup>

十三〥雨の日晴れの日

十四〥最後のおみくじ<sup>さいご</sup>

十五〥神々のめぐみ

十六〥その後

あとがき

157

155

137

124

115

106

97

87

75



作者〓和巻 耿介(わまき・こうすけ)

一九二八年、兵庫県に生まれる。

明治学院卒業。教員を経て文筆生活に入る。

日本文芸家協会・日本推理作家協会等会員。

主な作品に『天保漂船記』(毎日新聞社)『世界

界のミステリ入門』(小学館)『白老人の怪奇

談』(国土社)などのほか訳書もある。

現住所〓東京都世田谷区松原一―五〇―七

画家〓野崎 猛(のざき・たけし)

一九二三年、佐賀県に生まれる。

主として児童読み物のさし絵や、歴史資料画

の分野で活躍している。

主な仕事に『日本の歴史・全九巻』(みずうみ

書房)『小学校ベスト教科事典』(学研)『小

学校社会科学全集』(国土社)などがある。

現住所〓府中市北山町二―三九―三



# 地獄の上の五百日





## 一 帰り船

空はみがいたように、まっ青に晴れていた。

督乗丸は、あまり強くない北東の風を広い帆いっぱいにうけて、おだやかな波の上をすべるように進んだ。

文化十年（一八一三）十月の末とはいえ、現代のカレンダーでいえば十一月の末ごろにあたるので、風はだいぶつめたい。

船頭の重吉は、左の方にまるで絵にかいたようにくつきりとうきあがっている、安房上総（千葉県）の山々をながめた。

「親方、このぶんなら、上りも骨を折らんでよさそうやな。」

いつのまに來たのか、賄いの孫三郎がうしろに立っていた。

「さあ、そうであつてくれるといいが。」

「案じることはない。じまんするわけやないが、わしは親方の倍も長いこと船に乗つてゐる。」

と、孫三郎ははげますように言った。

重吉は二十九歳。孫三郎は四十三歳だが、年齢に関係なく、船頭は親方とよばれる。

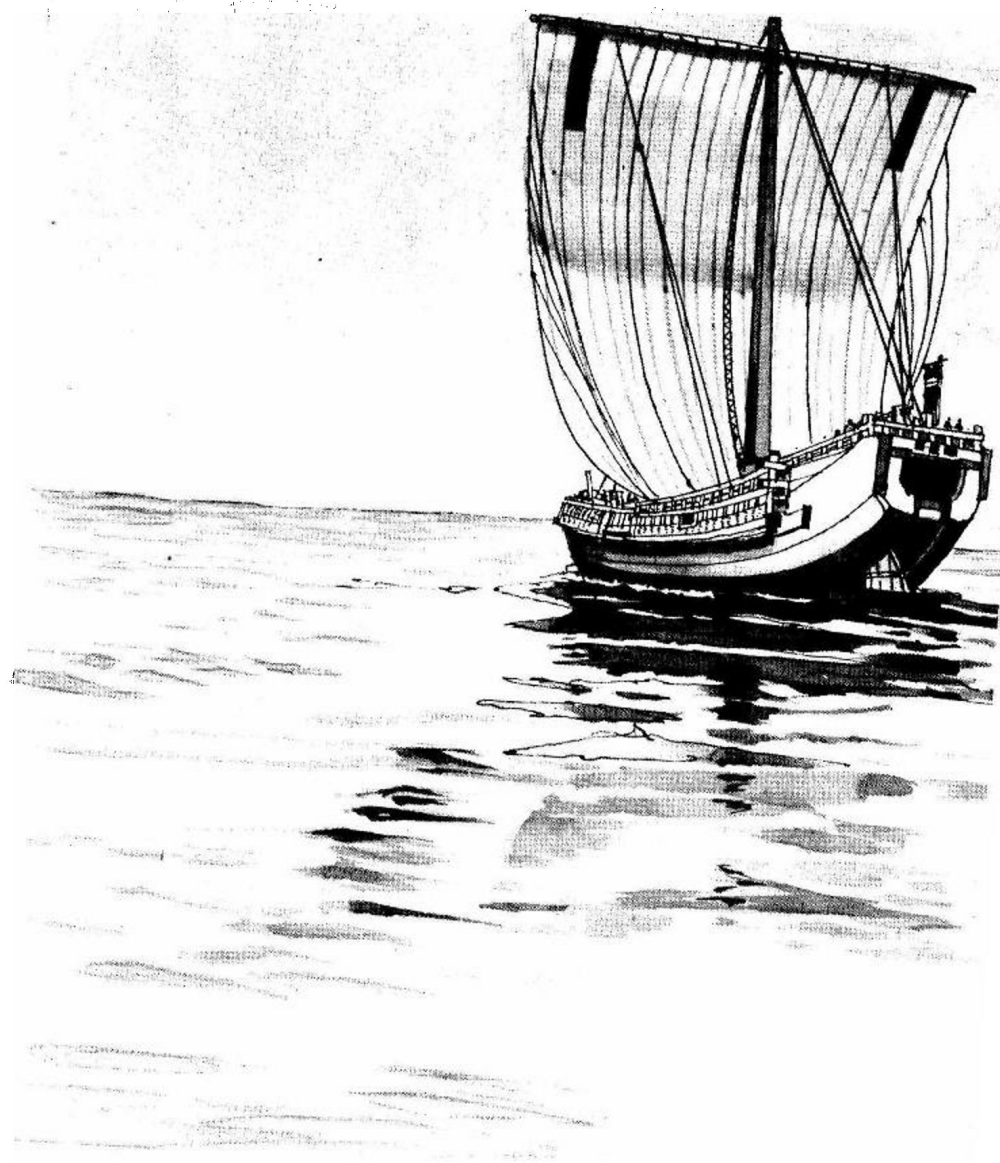
賄いというのは、荷物の出入りをしらべたり、帳面をつけたり、船の会計や事務をひきうけて船頭を助ける幹部で、事務長（パーサー）にあたる。

「下りはまる五日間やったなあ。」

江戸から名古屋、京都、大坂など西へ向かうのを上りといい、その反対は下りといった。

「うまいことまにし、（西風）をうけて、遠州灘を一気にわたれたでのう。」





「今度もうまいぐあいに、まひがし（東風）がふいてくれるといいが。」

「いや、そうそうこっちの思うとおりにもゆくまいが、のんびり帰るまでよ。」

知多半島の先端に師崎という港がある。現在は漁港というより、近くの島々での海水浴客やつり人があつまつてくる観光の港だが、江戸時代は尾張藩の商港の一つであった。

督乗丸は名古屋納屋町の回船問屋（海上運送業）小嶋屋庄右衛門の持ち船で、しばしば尾張藩の御用をつとめていた。

今度も、督乗丸は十月のはじめに藩のお米やそのほかの商品をつんで師崎を出港し、江戸でそれらの荷物をおろしたあと、油や大豆など買い入れた商品をつんで江戸を出帆、浦賀港で船改め（積み荷など船内の検査）をすませて、相模灘へ乗り入れようとするところであった。

「うん、孫さんの言うとおり、用心第一。けっしてあせるまい。」

藩のお米をはこぶのだから、他の貨物輸送のときのなん倍もの神経をつかわねばならない。それだけに責任をはたしたあとの帰り船は緊張しないというわけではないが、どことなくのんびりした気分になる。」

「そうや。あせつたらあかん。これからは親方も千石船の大将や。山のようにどっしりお

ちつておることや。」

十五歳から水主（ただの船員）として船に乗るようになった重吉は、そのような少年のころからすぐれた人物だったので、経験をかさねるうちに問屋の主人たちから能力をみとめられ、二十二歳のときに船頭にとりたてられた。

船頭には二種類あった。

船の所有者が船頭として乗り組んでいる場合、つまり船主兼船長を直乗り船頭。

やとわれて乗る船頭を沖乗り船頭。

重吉は沖乗り船頭として、これまで五百石とか八百石の船に乗ってきたが、今度、督乗丸の船頭が病気のため、仮船頭つまり船長代理として乗り組みをたのまれたのだ。

しかし、今度の航海をぶじにつとめれば、このあと督乗丸のほんとうの船頭になるだろうと言われていた。

現代は客船であれ貨物船であれ、ふつう、大きな船の船長になるには商船大学で勉強して、なん十年も実地の経験を つんで、法律が定めるところにしたがつて、船長免状をもらって はじめて資格ができる。

むかしは、もちろん、大学や船員養成所などあるはずがない。問屋の主人や先輩の船頭

など、まわりの実力者に能力をみとめられて船頭になる。

いずれにしても、実力がなければ船頭はつとまらない。

同時に、千石船は渡し船とちがって一人で動かせるものではないから、よい部下にめぐまれないと、やりにくい。その点、自分は運がいい、と重吉は思っていた。

重吉は思っていることを正直に口に出して言うのだった。

「親方ア……」

舵取りの藤助が、牛がほえるような声で重吉によびかけた。

「ちょっと風向きがかわってきよるがね。」

孫三郎との話に気をとられてうっかりしていたのだが、言われてみると、はっていた帆が横風をうけて、パタパタとのたうつようにゆれはじめていた。



## 二〓風待ち

督乗丸はその日の夕がた、伊豆半島の西岸の先端に近い子浦の港にはいった。風が、なぜ（西北風）にかわつたためである。

船は帆まかせ風まかせ

と、歌の文句にもあるように、千石船も風がなければ動かない。風があつても、逆風（向かい風）ではこまる。ぜひ順風（追い風）がふいてほしい。

もつとも、逆風でも、まっこうからふきつける風でなく、ななめからの向かい風や横風であれば、「間切り走り」といって、帆をじょうずにあやつり、ジグザグ型に前進する方法はある。

しかし、これはてまも時間もかかる。一キロ前進するのに五キロくらい走らせるようなこともある。

それに、西洋の帆船とちがつて、大きな一まい帆だけの千石船では、そう器用に方向をかえることができない。